

地域で作る地歌舞伎

お話を聞きした日…令和4年9月27日

話し手…伊藤麻里さん

聞き手…中島菜々子、志津晴巳

書き起こし…中島菜々子

プロフィール

伊藤麻里です。9月に誕生日がきて48歳になりました。

住まいは中津川市の本町です。

主人と中学校2年生の男の子と小学校4年生の女の子がいます。

地歌舞伎の振付師をしています。

家族みんなで歌舞伎に関わる

主人が浄瑠璃の三味線を弾いていますので、生まれたときから三味線が聞こえてきて、私の稽古するセリフが聞こえるなかで生きてきたので、子どもたちは自然と小さいころから歌舞伎をやっています。そろそろ、息子には裏方の黒子として、後見という仕事も少しずつさせるようにはしています。

好きなことを仕事に

どういう風に子どもたちに親の姿が映っているかはわからないですけど、羨ましいだろうなと思います。毎日よそのお父さんお母さんみたいに仕事に行きませんので。「お父の仕事って何い？」ってよく聞いて来ます。自分の趣味の延長線が仕事になっていますので、「自分の好きなことをやれるということはその前にはどれだけの苦労とどれだけのことがあったかということを考えなきゃだめだよ。」って言いますけど。いいなあ遊んでばかりでと子どもに言われてしまう。(笑)

歌舞伎を始めたきっかけ

文化会館の歌舞伎講座です。子ども歌舞伎講座は1年かけて1幕を勉強し、定期公演に合わせて稽古をしていきます。公演まであとひと月、おばあさん役が決まらないピンチのときに、歌舞伎保存会の方が「誰か子どもの役者おらんか」と一生懸命探して。うちの母に話が来たわけです。私は何にもわからないので別にいいよと言って、みんな1年かけてやるところを私だけ1カ月でなんとかしなくてはいけない。みんなは「大きな声でゆっくり」となんてお稽古の方法でしたが、私はマンツーマンで中村高女(たかじよ)師匠がとにかく「真似をしない、真似をしない」と。よく分からないまま稽古をして、やっつとセリフや所作が入り、みんなと合流したときに、みんなすごい棒読みなんです。そうすると「私ちょっと才能ある？」と子どもながらに勘違いしました。勘違いして本番を迎えて、一人だけ違うので大人に「あの子はどこで借りてきた子や、すごいすごい。」と褒められた小学校3年生はどこまでも登



っていく。(笑)

「来年もやりたい来年もやりたい」がずっと続いてきた感じですか。いろんな意味でああいい時期、いい縁、いいめぐり合わせだったなと思います。

経験者ではないですけど、歌舞伎に携わらせてくれた親にとっても感謝します。やめたいって言った時きつとあっただろうし。何か残るから、とにかく歌舞伎は続けなさい、ピアノはやめていい、みたいな親だったので。それがあつたおかげで歌舞伎しかできないですけど、親が続けさせてくれたので、今が残っている。

中津川と地歌舞伎

歌舞伎は安土桃山から江戸に代わるときに出雲阿国さんという方が始めて。江戸時代で人気が出て、東京、大阪、京都で公演をしていました。そうすると地方に住んでいる人たちは一年間かけて地域でお金を貯め、そしてくじを引いた2人が江戸に歌舞伎を見に行ける。行って帰ってきてこうやったあやつたとやりながら地域の人に説明する。歌舞伎役者も儲けなきやいけないので巡業公演をするようになります、歌舞伎が地域のほうまで来てくれるようになるわけです。そうすると観客が増えるじゃないですか。そのうちに見るだけじゃ物足りなくなり、自分もやりたいというようになる。自分たちで地域の大工さんに頼んで芝居小屋を建てたり。神社の境内に舞台を作ったりして、自分たちで芝居をするようになったのが地歌舞伎の始まり。

全国に地歌舞伎の文化はあります。今も播州、姫路の方も盛んです。埼玉の方でも盛んです。ただここまできゅつとこの狭い地域にいくつも保存会が残っている地域はない。

岐阜県には地歌舞伎保存会が27団体ありますが、東濃だけで15団体。中津川に6団体。この常盤座が残っているのもそうですが、全国にずつとあつたのが戦争で焼けたり、映画館になったり芝居小屋がなくなっていく。これも明治座も蛭子座も残っていませんけど。この辺では焼けずに残って、映画館にならなかったこと。あと衣裳とかつらが焼けずに残ったこと。この地域にたまたま歌舞伎保存会が多かったり、振付師が多かったこと、地歌舞伎が盛んなのはそれが一番大きな要因じゃないかなと思います。

地歌舞伎の振付師

市内の6団体が中村高女師匠が振り付けをされていた保存会です。私も高女師匠について6団体をまわっていました。色々諸事情があり、ちょっと分かれましようかということですが2団体。高女師匠が、あなたやっていきなさいってふうに言うてくださった中津川と常盤座。今はもう一団体増え、恵那歌舞伎保存会の三団体を私が見させていただいています。

振付師は太夫も三味線も分らないといけません。芝居の内容から、セリフ。チョンで開いて、チョンで閉まるまで。これを組み立てる役割を持っている。衣裳から、芝居に関わることをすべて把握して



やっていくものだから振付師のことを師匠と呼びます。私は周りから比べるとまだ若いので、80くらいになってからにしようと言っています。(笑)

明日からやらなくちゃいけなくなった振付師

中村高女師匠は、恵那の方です。ご主人は3代目中村津多七(つたひち)です、だいぶ前に亡くなりました。中津川の吉田茂美さんという方が4代目の中村津多七を襲名されてこの6団体を高女師匠と一緒に教えてみえました。当時高女師匠が80歳、津多七が60歳、私が40歳。ちょうどいい感じで渡していけるね、と話していましたのが、8年前に津多七も癌で亡くなってしまいました。真ん中が抜けてしまったので、さて困った歌舞伎がでなくなってしまう。私はいつかはやらなければいけないと思っていましたが、あと20年あるかな、と思っていたのが明日からやらなくては行けないような状態になり。

これはなんとかするしかないということで高女師匠について6団体を回りながら勉強させていただいていましたが。やっぱり経験が無いので4代目中村津多七のようにはどうしてもいかない。しかも女だし、若いし、それが邪魔で邪魔で仕方ありませんでした。かといって80を過ぎた高女師



匠はもう高齢で、私を教えることはできませんでした。

私は42歳の時に「うまくならないので教えて下さい」と京都の先生にお願いに伺って。今、お世話をしてくださっているのが京都の振付師、岩井小紫(こむらさき)師匠です。

私は10歳から芝居していましたので自信はありましたし、もちろん振付師になるつもりでずっと稽古してきましたので、私ナンバーワン役者だわってどこかで思っていました。長浜に行き京都の師匠に習っている方々と並んだときにもう愕然とするレベルの差!今まで自信があった鼻をみごとにへし折られ。一から学び直さないとこれはどこでも通用しないと気づき、上には上がいるな、と感じて。真剣に通わせていただいています。

芝居は元の本に忠実に

振付師によって振付も変わるし、演出も変わるし、全く違う風にもえます。大きい舞台だったら、いかにからだを大きくみせて、大きな動きで。4畳半くらいのところで芝居をする曳山だったら、その中で重視するのはセリフや如何に型を美しく見せるかになるかもしれません。場所によっていろんな演出方法で芝居は変わっていきます。しかし、芝居の本は元をただせば1冊。分からない方だと面白いからと変えてしまったり、地歌舞伎はそういうことができちゃうのでこわいところです、なるべく忠実に、元の本に忠実にいきたい。歌舞伎は人形浄瑠璃と同じ、義太夫というものに関わる唯一の演劇だと思うので、それを守りながら崩してはいけなないと思いつながら組み立ててやっています。

コロナ禍で続けていく公演のかたち

定期公演は3月の何週目とか、1月の何週目とか決まっているので、だいたい2カ月前から稽古に入

り、みなさんの仕事が終わってから集まって、長い時だと「もう次の日になっちゃうで帰るぞ」と言いながら。今はコロナで、早く帰るよという感じにはなりませんけど、ちょっと前までは遅くまで芝居について話したり。

芝居小屋は椅子席のように区分けができないのでなかなか難しいものがあります。でも常盤座は今年6月に定期公演を久しぶりにやりました。

芝居小屋はツアー客が多いです。公演の日に合わせてバス会社さんがドンと連れて来て下さってという芝居のやり方でしたが、今回はツアーはお断りさせていただいて。地元の方と、情報を自分で仕入れた遠方の方がおみえになりました。

ソーシャルディスタンスで、席を広くとってということをしてみたり。「なんとか屋！」と声をかけるのが大向こうですが、やっぱり地芝居は大向こうも演出の1つですので、声がかかると役者はピリッとしますし。そういうことも考えて大向こう席をビニールを張って、飛沫を防ぐように作って実施してみたり。

元には戻らないかもしれないですけど、なんとか元のかたちに近づけられるようにできればなと私が提案したら「よし、やろう！」というふうには保存会も賛成してくださって。芝居小屋でのウィズコロナみたいに、コロナ禍でも続いていくモデルになればいいなと思っています。

継続する労力

やっぱり大変じゃないですか、1公演するのって。お金もかかるし、労力もいるし。それが他の所も辞めたからいいかって諦めるかたちになってしまふと続いていくものも続かなくなりますので。常盤座や、私が振付に来ているところは何が何でもやると。努力して気を付ければ絶対できるから。みなさんと一丸となつて、なんとかやっています。

あまり長い時間公演がないと皆辞めてしまったり、忘れてしまいます。引き継いで行く力は本当に大事にしないと簡単になくなる。でもやり続けてきたところにしてみたらすごく意味のあることをやってきたなと今になって思うのでよかったです。

役者の獲得が大変

地歌舞伎の役者はだいたい地元の人です。ここだったら福岡地区、高山から下野、田瀬。福岡地域で誘拐されてきたみたいになってますけど。(笑)

代々おじいちゃんが役者をやり、親父がやって、おれもやって、息子もやって、孫もやって、とお話しくださる保存会員もお見えになりましたが、今難しいのは、他に楽しいことがいっぱいあるじゃないですか。なので、後継者不足、若い人をどうやって取り込んでいくか。稽古も60歳で仕事引退されて入る方のほうが集中もするし、面白さも分つていただけだけど、欲しいのは30代、40代。その年代の方を一回連れてきて、どうやって面白さを伝えるかということにかかってくるので、残ってもらえるように頑張っています。それこそ常盤座に言うのと、今年の6月も、新しい若い人がおもしろい！



って残ってくださってメンバーが増えました。

後継者問題は中津川市だけではなく全国で役者が少ない、若い人がいないというのはあると思います。今回常盤座は、新しい方がパツと入ったときに、今まで主役しかしたことないおじさんお婆さんが全員端役になり、新人を全員主役にして。そういうことができる保存会しかこれからは残らないと思う。「自分が自分」とやっていたら新人なんて育たない。

これからの地歌舞伎

振付をした所や、全部ではありませんが、太夫で伺った所とか私が役者で出ている芝居とかを、「マリさんと【女流歌舞伎】」という名前のユーチューブでチャンネルを出しています。その中にコメントをつけて、芝居をそのまま見るよりも面白いよって言っていたいたり。このコロナ禍になったことももちろん大きな要因でもありますけど、今は画面を通してどうやって見えるかということまで考えないともうやっていけない。

そのユーチューブで「わはは」って笑って興味をもってちょっと見に行ってみよかとか？そして中津川市に来て泊まり、そして通ってるうちにここに移住しようかという話になることが、もう一番良い。地歌舞伎を見てほしいし、できたらここに住んで一緒にやってみましょうよと。

子どもたちが地歌舞伎を通して社会を学ぶ

お稽古で叱られて、ぼろっと涙を流す子どももいる。でも、芝居小屋の雰囲気の中でたくさん的人数で関わって夜お稽古に来るということ自体が非日常じゃないですか。ご挨拶から始まって、靴を揃える、当たり前のことが当たり前でできるようにくどくど言うのでピシっとした子になっていく。私が見てる歌舞伎保存会は、すぐく大人が子どもを叱ってくれる。今はふざけていい時間、稽古着を着たらきちんとしなくてはいけない、というメリハリがつくと、学校でも、今は黙っていなくてはいけないんだな、というのが分かりますし。最初はどうしたものか：と思う子でも芝居が終わるころには、きちんとしたご挨拶ができるようになっていたり。親御さんからも、ちょっと歌舞伎をやったら落ち着いたなんて言われたりします。子どもたちも大変なことをみんな体験すると仲もよくなったり、次はこの役やってみたいとか子どもたちの中でそういう話が出ているので楽しかったのかなと思っています。

地域の三世代で作る地歌舞伎

やっぱりこうやってお年寄りから若い子まで三代で関われることは本当に少ないので。こういう機会です子どももお年寄りも関係なく1つの芝居に取り組んで、同じように叱られ。1つの芝居をみんなで作り上げるという作業。

やっぱり地歌舞伎の地は、私は地域の地だと思っています。その地域で作っていくということだと思うので。簡単なんですよ実際。振付師、三味線、大夫、裏方の人たち、大道具さんだってお金さえ払



えば都会からでも、職業としていっばいみえるのでお金さえ払えばたぶん来てくれるし。その都会からの松竹の大部屋の役者さんとか芝居自体も洗練されてるわけです。最初はよく映るのかもしれないけど、やはり地域で守っていくには地域で裏方から役者までを育てていかないと。

次につながるように地域で守り育てていく

ずっと守り続けていく古典というものはありますし、決まった型もある。守るべきものは守る。ただ、今の時代に合ったことをしないと、ただ古臭いだけのものになってしまう。時代に合わせて変えて行かなければいけないものは絶対あります。今までも変わってきているはずなんです。「新しいこと」は批判をいただくこともありますけど、守るべきところは守る、変えていくところはちゃんと訂正して変えて行くということが、長く続かせることにつながると信じてやっています。



ここ福岡にはありがたいことに芝居小屋があり、この芝居小屋を守っていくとする保存会のメンバーがいて、守っていくというのを、私は中津川の人間ですけれどもこの地域が羨ましいと思う。そういう大人が一生懸命になれば、子どもだって絶対に何かを感じて次は自分たちが守っていかなくちやいけないのかなと考えてくれます。全員でなくてもいいので、そういう人を育てていきたい。地歌舞伎の長い歴史の中で、私も点なんです。この点が続いてきたのがたまたま線になっている。私のところで点が終わってしまうのは申し訳ないので、私も次の点につながるように人を育てることだと思っています。

目指す地歌舞伎

1日公演の中で、新人ばかりの幕、子どもたちの幕、そして1本どこにも負けない芝居があります！というのが私は一番いいかなと思います。パッと見ても「ああ素人の歌舞伎ね。」ではなく、「こらあ素人でもこんだけやられちゃったらちよっとプロとして恥ずかしいな。」とプロの役者が言うくらいの芝居を私は作りたいなと張り切っています。